一面薄暗さが漂う森の中。

灯りもなく音もなく、ただただ闇のような色が広がりを見せる世界。

気が付けばそんな場所に俺は倒れていた。

ゆっくりと上体を起こす。一体いつからここにいたのか、なぜこんな場所にいるのか。すこし頭の中を整理してみるもそれはどうしてか思い出せず、つい先ほどまでの記憶だけがぽっかり空いた穴のように抜け落ちていた。

　呆然と辺りを見渡すもやはり景色は変わらず、今にも呑み込まれそうな静寂の闇の中に自分独りと言う事実が恐怖を掻き立てる。

　とりあえず落ち着こうと一旦大きめの深呼吸を一つ。肺に出来る限りの空気を取り入れ、そして吐き出す。こんな状況だからこそだろうか、いつも以上に澄んでいて美味しく感じる。

……まあそれはどうでもいいことで。

　やがて暗闇に慣れた目は曖昧だった辺りの輪郭を徐々に映し出す。と言ってもさほど変わりはなく、数メートル先がぼんやりと見える程度で、法則性なく立ち並ぶ背の高い木々が俺の周りを囲んでいた。四方八方似たような景色。どこに足を向けていいのかさえ躊躇われる。

——そんな時だ。キィーンとやけに高い音がどこかで響いた。それはおそらく金属音。

「誰かいるのか……？」

　静寂を切り裂いたその音は、この場に自分以外の誰かがいるかもしれないという安堵と同時に、こんな場所に人がいるはずがないという疑心を俺にもたらした。

　今の音の正体は一体何なのか。もし霊的現象の類なのだとしたら……いや、でもこのまま立ち尽くしていても何も解決しないだろう。もし本当に誰かいるのだとしたら道を聞けるし、これが現状唯一の手段であることに変わりはない。

そうして俺は音が聞こえた方へと足を動かした。

土と雑草の感触を踏みしめ、視界の悪い中をゆっくりと進む。

三分ほど歩いた頃だろうか、少し先に小さな灯りが見えた。俺は歩く速度を更に落とし、音をたてないよう忍び足で近づく。

謎の灯りとの距離まであと数メートルといったところ。そこからは森を分断するように細い道が続いていた。一旦様子を見ようと近くにあった木の陰に身を隠し、そこから顔だけを覗かせる。

細い道の上をゆらゆらと揺れる不気味な灯り。それが一瞬人魂のように見えて息を呑み込んだが、すぐにそれは違うと認識した。

灯りの正体は吊り灯篭。そしてそれを持って歩いているのは、一人の少女だった。

空色の着物に薄紅で花柄の羽織を纏い、灯篭で微かに照らされるその顔からは若干あどけなさが見て取れる。背丈の低さから見ても、俺より三つか四つ年下。恐らく十二、三歳くらいだろう。栗色の髪を紐で上の方にまとめ、腰の位置まで垂らしている。

灯篭で照らされるそんな少女の姿がどこか幻想的で少しの間見とれてしまったが、パキッというやけに甲高い音で我に返る。今のは一体何の音だろうかと、薄々勘づきながらも俺は片足を浮かしてみる。するとそこには二つに折れた木の枝がある訳で。

どうやら原因は自分のようだ。そして、こんな静けさのこもる場でそういう音を出せば当然の如く——

「「…………」」

　——注目を集めるに決まっている。

　視線が交錯し、沈黙が流れ、言い知れぬ気まずさが場を支配した。

　自分以外の誰かと出逢えたのは結果的に見ればいい事なのだが、本音を言えばもう少しマシな出会い方をしたかった。これじゃまるで不審者まがい、いや、それそのものだ。木の陰から誰かを覗き見る行為、ましてやそれがこんなシチュエーションともなれば不審者と断定するには十分な判断材料。もはや不審者を超えて変質者と言い換えても相違ない。

　しかし何故か少女はその場から動こうと、もとい逃げようとしない。急に現れた俺に怯えて足が竦んでいるのか、或いは逃げたところで追いつかれてしまうと悟っているのか。どちらにしろ俺に弁解の余地がないのは確かだった。

　固唾を呑みながらただ彼女の反応を待つことしか出来ない。

すると、その口がゆっくりと開く。

「あの、そんな場所で突っ立たずに、こっちに来たらどうです？」

…………え？

予想外過ぎる一言に一瞬俺の耳が壊れてしまったのかと疑うが、『こっちに来たらどうです？』、確かに彼女はそう口にした。こんな状況でそのような発言。それが逆に怖くなり数歩後ずさってしまう。と、足が絡み合い不格好に尻もちをついてしまった。

「あ……大丈夫ですか？」

すると少女は俺のすぐ傍へと近寄り、片手を差し伸べてきた。

どうしたものかと躊躇するも、俺はその手を取る。

そして立ち上がり様、ふと問いかけてみた。

「……自分で言うのもなんだが、俺が怖くないのか？」

　もし立場が逆なら必ずと言っていいほど、俺はこんなにも相手に歩み寄ったりしない。執拗に絡んだりせず、とにかく人目につく場所まで走って逃げる。

だが少女はそれをしない。むしろ相手に優しく接しようとしているまである。

　その行為が俺にはどうしても理解できず、なにか裏があるような気がしてならなかったが、少女は「いえ、慣れてますから」と、ただ淡々と答えるのであった。

「もしかして道に迷っているんですか？」

　続けざまにそう聞かれた。

「ええと……いや……その……はい、恥ずかしながら」

　相手が年下だからって変に誤魔化しても仕方ないだろう。もともと道を聞くためにここまでやって来たのだから。それにしてもあれだ。今この瞬間、年上としての威厳と言うか誇りと言うか、そんな類のものがどこかに零れ落ちた気がする。無性に悲しい。

「……じゃあ私が案内してあげましょうか？」

「えーと、いいのか？」

　こちらとしては願ってもない申し出。自分の口からこんなお願いを言うのは躊躇いがあったが、そんな心境を察してくれたかのように少女は助け船を出してくれた。

「はい、大丈夫です。私はここの案内人ですから」

　案内人……？　なんでそんなことをしているんだと一瞬思ったが、少女の話はまだ続く。

「それにこの森はとにかく広く、普通の人が下手に動くと却って抜け出せなくなる危険性もありますから」

「え、ここってそんなに危険な場所なのか？」

「そうですね。一度入ると二度と戻って来られない。足を踏み入れたら最後、死ぬまで彷徨い続けてしまう。その恐ろしさから界隈では迷いの森とも呼称されているほどです」

　想像していた数倍やばそうな場所だった。そしてなぜそんな場所で俺は倒れていたのか。

「それにしても迷いの森か……。物騒な名だな」

「はい、私が命名しました」

　お前かよっ⁉

「あ、それと因みに、界隈と言っても私一人だけです」

　界隈とは一体……。ん？　と言うか一度入ったら二度と戻って来られないって、え、それじゃもう俺たち詰んでね？　最初からゲームオーバーという定めを背負って生きてる感じなのか？　いや、そうならない為に彼女が案内してくれるって言ってるんだろうけど……。

　ちらりと横目で少女を見る。俺の答えを待っているかのように少女もまたこちらを見ていた。

「……どうしますか？」

折角の申し出だ。断る理由はないだろう。

「じゃあお願いしてもいいか」

「はい、分かりました」

　そうして細い道へと戻る。すると、少女は何故か袖口を探り始めた。

何をしているのだろうとその様子をただ不思議に見つめ数秒、何かが取り出される。握られた拳がゆっくりと開かれるとそこには——

「……コイン？」

　いたって普通の……いや、違う。注視してみるとそれは見たことないコインだった。

　一方は花が描かれ、もう一方は鳥が描かれている銅色のコイン。よく分からないが、普段過ごしている中であまり見るようなコインでないのは確かだった。

　先ほど聞こえた金属音の正体は恐らくこれだろう。

「花が表で鳥が裏。仮にこっちの道が前でこっちの道が後ろとして、どっちに進みたいです？」

「…………？　えっと、どういう意味だ？」

「行き先を決めるんです。コイントスってやったことないですか？」

「いや、あるけど……」

「じゃあ話は簡単です。進みたい方向と、コインの裏表どちらか一方を選択してください。もし自分の選んだ方の面が上を向けば自分の進みたい方向に進めます」

　それは世間に広く知られたコイントスのルール。決定権をコインに委ね、自分の意見を通す方法。この場合の意見とは自分の進みたい方向という訳だが……。

「え、ちょっと待って。なんでコイントスしようとしてるんだ。君が案内してくれるんだろ？　というかそれ以前にコイントスって……」

「これもまた一つの案内方法です。言うなればコインのまにまにとでも呼ぶべきでしょうか。わたしの案内なんてほぼほぼ当てになりません」

……どうして。そう聞こうと思ったがそれよりも先に少女の口が動く。

「この森は常識が通じませんから」

　常識が通じない……。

「……ただの森、だろ？」

「そうであってそうでない。私に言えるのはそれだけです」

　聞けば聞くほど頭の中がパンクする。この森は一体何なんだ。超常現象的な何かが起きるとでも言うのだろうか。

「それで前か後ろ、どっちに進みたいです？」

　少女はまたも問いかけてくる。

こちらは今いろいろなことで脳が思考を放棄しかけているのに、まるで既に理解したかのように少女は話を進めてくる。もうちょっと俺に気を遣ってくれてもいいんじゃないか。

「……決めるのは別にいいんだが、なんでコイントスなんだ？　まあ悪いって訳じゃないんだけどさ、それって意見が対立した時にとる手段であって、俺たちは別に意見が分かれている訳じゃないだろ？」

「いえ、分かれます」

「…………？」

　それはどこか含みのある言い方。まるで未来が視えているかのようで、俺が「どうして？」と尋ねると少女はこう答えるのだった。

「あなたと逆の意見がわたしの意思ですから」

　頭の中を埋め尽くす無数のクエスチョンマーク。

　それが自然であり、当然といった風に少女はただこちらを見つめる。一体どういう意図でそのような発言をしたのかこちら側としては知る由もない。でもその言葉はべつに煽っているわけでも怒りを誘っている訳でもないというのは、彼女の真剣な表情を見れば明らかだった。

「……はあ、分かったよ。後ろだ後ろ、俺は後ろに行きたい」

　だからだろうか、気が付けばそう答えていた。

「じゃあ私は前で」

「…………」

　息をもつかせぬ早さ。知っていたことだが、真正面から堂々と自分の意見を否定された。別に考えて決めたわけではないが、この何とも言えないもどかしさはどこに捨てたらいいだろうか。

　そんなこんなでコインの裏表の選択を二人で話し合い、その結果、少女が表で俺が裏となる。

「あ、これをお願いします」

　コイントスをするのに邪魔なのだろう。俺に灯篭が受け渡される。

そう言えばいろいろなことが衝撃的だった為にあまり気にならなかったが、こうして辺りをよく見て見ると、先ほどまで暗がりに満ちていた周囲が灯篭の灯りで随分と明るいオレンジ色に書き換えられていた。随分と言ってもまあ、海の中に光を一滴垂らした程度の明るさだ。十メートルも進めばそこはまた暗闇なのは変わりない。

だがそれでも、見知らぬ闇を照らすには十分な明るさだった。

「じゃあ行きますね。せーの」

　その合図と同時、少女の親指から弾かれたコインが甲高い音を上げる。

　灯篭の光を淡く反射しながら、空中で勢いよく回転し、そして、重力に従って次第に落下してくる。彼女はその予測落下地点に手の甲を構え、触れたその瞬間、もう片方の手をタイミングよく覆いかぶせキャッチした。その動作は終始手際のよいものだった。

　そんな光景に見惚れ若干呆けていたが、すぐに我に返る。

　そして覆いかぶせられた手がどけられる。コインの面の柄は……花。つまり——

「……表、ですね」

　少女が呟く。要するに俺の意見は通らず、彼女の意見が採用された。確率的には二分の一なので当たってもおかしくはなかったが、そこは俺の運が足りなかったという事だろう。

「じゃあ行くか」

早速歩き始めようと足を動かした途端、少女は何かを思い出したように「あっ」と声を上げ立ち止まった。

「そう言えば忘れてました」

「まだ何かあるのか？　言っとくがもう並大抵のことで驚いたりは——」

「——あなたの名前です」

俺がそう言い終わる前に少女はと告げた。

　その言葉に俺も足を止め、ふと思い返してみる。

　そう言えばまだお互い名乗ってない気がする。

そうだな、これから少しの間世話を掛けるし、教えておくのが筋というものだろう。

「俺はだ」

　俺が簡潔に名前を述べると、少女もまたそれに続いた。

「私はです」

　思ったよりも随分あっさりとした自己紹介になってしまったが、まあこんなものだろう。

　そうして互いに名前を教え合った俺たちは、コイントスの結果に従い、後ろ方向へと歩き始めた。

　　　　　　　　　　〇

　暇を潰すために取り留めのない話題を消化する。そんな他愛もない話ばかりを繰り返ししばらく歩いていると、やがて分かれ道に差し掛かった。

　どちらも先の見えない暗闇が続く、まさしく冥府の入り口にも似通った道。

「右か左、どっちに行けばいいんだ？」

　そう琴に問いかける。

俺はこの森のことをまったく知らないので、とりわけ彼女に聞く方が手っ取り早い。

…………っていうか今の俺、限りなく役立たずだな。

今の自分の実情を身に染みるほど実感させられる。手伝いたいのは山々なんだが、実際問題こうする以外に選択肢がないのが現状だ。

　と、再び袖口から取り出されるコイン。

「またやるのか」

「こういう時の為のものですから」

「取り掛かりが早いな……」

「そうしないと道が消えてしまう可能性がありますから」

「そうなのか。…………ん？　えっと……ん？」

「どうしました？」

　二人で顔を見合わせる。

「え……道が消えるのか？」

「はい」

「それはいわゆる、吊り灯篭の中の灯りが消えて周りが見えなくなるっていう意味だよな？」

「いえ、言葉そのままの意味で、消失です。さっきも言ったように、この森は常識が通じません。だから道が消えてしまう、そういうことです」

「そういうことです、じゃなくて！　え、何、常識が通じないってそう言う意味なの⁉　コンパスとかが上手く作動しないとかじゃなく、さっきまでそこに見えてたモノや場所がいきなり消えたり現れたりするとかそういうレベルの話なのか⁉」

「そういうレベルの話です。なので受け入れてください。郷に入っては郷に従えとよく言うじゃないですか」

「とんでもない郷だな！」

　デタラメ過ぎるにも程がある、と声を大にして叫びたい。だが琴が嘘をついている風には見えないし、そもそも嘘をついたところで彼女にメリットがあるとも思えない。だとすれば琴が言っていることは恐らく本当なのだろう。

　これが常識が通じないという事ならば、彼女の言った通りまずは受け入れるところから始めた方が良さそうだ。何事も順応しなければ始まらない。ならばもう何も疑わず、ありのままを信じることにしよう。……というのが実のところ建前で、本音はこれ以上余計な思考を働かせるのが面倒だった。

「で、右か左、どっちに進むんだ？」

「どうぞ先に決めちゃってください。私は要さんの決めた道とは逆の道に行くことを提案しますから」

　そう言えばそうだったな、と心の中で思いつつ俺はどちらに進もうかと頭を悩ます。

　どちらの道とも先の見えない暗闇が続いている。まるで、鏡で左右反転させたかのよう。こうも選ぶきっかけとなる情報がないと決めるに決めれない。いや、先ほどみたいにただ直感で決めれば済む話なのだが。

　……そう言えば何かの理論で、二手に分かれた道で右に行くか左に行くか迷った時、右に行った方が安全と聞いたことがあるようなないような。

　とりあえずはそんな朧気の知識を信じて右を選んだ。そして彼女は左を。

「じゃあ表か裏、どっちにします？」

「……さっきは裏を選んだし、今度は俺が表でもいいか？」

「べつに構いませんよ。それじゃあ私が裏ですね」

　琴はそう言いながら親指の爪にコインを乗せ、そして、「せーの」という合図で弾き出した。

　勢いよく上昇。やがて一瞬の停滞を経て、ゆっくりと落下。キャッチ。

　一連の流れがスムーズに進行し終わる。何だかやけに手慣れた動きだ。恐らく何度もやって来た証拠だろう。

　そんなことをぼんやり思っていると、彼女は重ねた手をどけた。

「……またか」

　ため息交じりに呟く。

　現れたコインの面には鳥が描かれていた。つまりは裏で、琴の意見が採用されたという訳だ。

　自分の指定した面が出る確率は二分の一と当たりやすいが、こればかりは運なので仕方ない。まあ俺としてはこっちの道に進みたいという絶対の意思を持って臨んでいる訳じゃないので、どちらの面が出るかなんて正直なところどっちでもいいのだが、彼女にはよく分からない拘りがあるらしい。……けどそれが何なのか俺には知る由もない。出会ってまだ十数分なので当然と言えば当然なのだが、俺には琴の考えていることがよく分からない。一体何を考えているのだろうか。

「それじゃあ進みますか」

「ああ」

　そんな疑問を一人心に抱えながら、俺たちは左の道へと歩を進める。

　そんな中、そこでふともう一つの疑問が生じた。それはもっとも素朴な疑問。

なぜ琴はここにいるのかという事だった。いやべつに彼女が邪魔だとかそういう意味ではなく、それに関して言えば、こちらとしてはむしろありがたいまである。こんな訳の分からない森の中、彼女に出会わなければ俺は今頃どうなっていたか分からない。もしかすると最悪、死ぬまで歩き続けるはめになっていたかもしれない。そう思うと自然と悪寒が走る。

でも、だからこそだ。この森の恐ろしさはその事を教授してくれた彼女自身が一番身をもって実感しているはず。それなのになぜ森に入ったのか。出られるにしても普通は入ろうとしないだろう。それなのになぜ……。

　隣を歩く彼女に視線を移すが、それは寸前のところで躊躇われる。

もし何か重大な理由があるのだとしたら、それは簡単に聞いてはいけないような気がした。

　誰にだって踏み込まれたくない話の一つや二つはあるものだから。……そう、誰にだって。

　と、俺の視線に気づいたのかふと目が合う。

「どうしましたか？」

「……いや、なんでもない」

自分の胸の内を悟られないよう自然と誤魔化すが、口調は少し動揺したような気がした。

けれど彼女は「そうですか」と、おそらく何かあることに気が付きながらもそれ以上の詮索はやめてくれた。それは親切心なのか、はたまた興味関心が湧かないだけなのか。まあ胸の内にズカズカと入り込んでくる輩よりは幾分マシだ。

だがそんなあっさりとした態度にもどかしさを覚えてしまうのは一体どうしてだろうか。

自分でもよく分からない感情を抱えながら、またしばらく歩く。

相も変わらず変化のない景色は、まるで前に進んでいないような錯覚を起こす。いや、この森に常識が通じないという事ならば、先ほど彼女の言っていた道が消えてしまうと言ったように、俺たちは本当に前にすら進んでいない可能性だってある。だとするならばそれはもう厄介どころの話ではなくなってくる。本当に勘弁願いたい。

　すると、隣を歩いていた琴が急に立ち止まった。

「どうしたんだ？」と俺が口にしようとするが、それよりも先に何かが聞こえてきた。俺も立ち止まり、その音の正体を探るべく耳を澄ませてみる。

　それは馴染みある音。心を自然とリラックスさせられるような、気持ちのいい音だ。

「…………水が流れてるな」

「はい、流れてますね」

どこからかそんなせせらぎが聞こえる。

　その音の発信源はどうやら、今歩いている道の先から聞こえているようだ。それは単なる偶然か、或いはこの森のいたずらか。どちらにしろ、このまま何もないよりかは断然いい。

　そうして俺たちは足早に、再び歩き始める。躓かないよう、足元に気をつけながら。

　一歩一歩進むたびに少しずつ音が大きくなる。それは確実に近づいている証拠。

　そして数十メートルほど歩いた頃か。視界が開け、その音の正体があらわになる。

「……川ですね」

　彼女がぽつりと呟いた。

それに俺は「ああ、そうだな」と同調する。

予想したとおり、そこには川が流れていた。けど——

「……流れ、ヤバすぎないか」

　幅五メートルほどの小さな川。水深はそこまでないだろうが、流れる速さは別格。頭の浮き出た石に水がうちつける音も相まって、危険な雰囲気を醸し出していた。例えるならそう、横に流れる滝と表すのが一番しっくりくる。

こんな落差のない場所でここまで流れるスピードが速いなんてありえるはずがない。これもまたこの森のせいなのだろうか。

もしここを渡るとなったら至難の業だが、川の向こうにはまだ道が続いている。

「どうしますか？」

　その言葉は俺に渡るか渡らないかを選べと言う琴の意思表示。そして俺がそのどちらかを選ぶと彼女がその逆を選び、再度コイントスが始まるのだろう。いや、まずこんな重大なことをコイントス如きで決めていいものなのだろうか。

　とりあえず俺の答えは、渡らない、だ。それが賢明な判断であることは考えるまでもない。

そう自分の意を伝えると、彼女は案の定「じゃあ私は渡ります」とその逆を提示してきた。そう言うだろうなとは薄々感じていたが、そこまでしてコイントスに……いや、俺と反対の意見を通そうと固執するのは一体なぜか。

彼女は自分の意見を俺へと強要するのではなく、あくまで主張するだけ。もし自分の思い通りに事が運ばないなら、その時は俺を見捨て一人で歩いていくのも一つの手だろう。けど彼女はそれをせず、俺の手助けをしてくれている。その行為が善人故と言うのは口にするまでもないが、案内をすると言っているのに俺に選択肢を与えているのはどこか矛盾している気がする。それじゃまるで俺にも決定権があるようなもの。……ってまあ実際そうなのだが。

「どうしました？　表か裏か、決めないんですか？」

　首を傾げ不思議そうにこちらを窺う琴。その指には既にコインが握られていた。……準備万全のようだ。

　さてどうしたものか。心の中で自分に問いかける。もしここで俺が「嫌だ」と自分の気持ちを素直に表明したら、彼女は優しいのでおそらくそれを受け入れてくれることだろう。けれどそれを口にしたら俺が後々罪悪感に苛まれること間違いなし。

なぜなら、彼女は優しいから。会ったばかりの俺にここまでお節介を焼いてくれたのだ。

そんな優しさを無下にするということを俺は出来る限りしたくない。

　ならば答えは最初から決まっているようなものだった。

「…………裏だ」

　自分でも単純な理由だと十分理解している。

だがそのくらいが今は丁度いいと、何故かそう思ってやまなかった。

「また裏ときましたか……」

「あ、べつに逆でもいいぞ」

「いえ、私は表でも大丈夫です」

「そうか？」

　直感に頼る質なのだろうか。それにしてはさっきからあまり意見してこないような……。

　よく分からないが、彼女がそれでいいと言うのならべつにいいのだろう。

「じゃあ行きますね。……せーの」

　その掛け声とともに行われたコイントスは、結局表が出て彼女の意見が採用されるのだった。それはつまりここを渡るといったゴーサイン。

　それにしてもまた彼女の勝ち。単なる偶然かもしれないが、三回連続ともなるとなんだか怪しくさえ感じてしまう。まあそんな疑心もコイントスの醍醐味なのだろう。

けれど一体どうしたものか……。

　そんなことを思っていると琴は、

「危ないのでこれは私が持っておきますね」

　と、俺の手から灯篭を取っていった。

　そう言えばずっと俺が持っていたっけ。……じゃなくて、え、危ないので？　なんだ、何をする気なんだ？

　そう思案するのも束の間、彼女は川岸へと歩き出し、そして、地面を蹴った。

「お、おい！」

　俺が追いかけ手を伸ばすも間に合わない。

いや、間に合わない方が良かっただろう。それは、彼女の姿を見て思った。

　石から石へ、器用な身のこなしで次々と飛び移り、一瞬にして川を渡り終える。

「まじか……」

　あんな動きにくそうな格好をしていてよく無事に渡れるものだ……。驚きを通り越してもはや感心に値する。

「要さんもちゃちゃっと渡っちゃってください」

「いや、そうは言っても……」

　向こう岸から声を掛けてくる彼女を一瞥し、少し視線を落としてみる。

　激流。荒々しい音がそのすべてを物語っていた。

　一歩でも踏み誤ったら、恐らく俺の意識は文字通り呑み込まれてしまうだろう。そんな可能性があると思うと自然と足が竦んでしまう。

けれど、ここで立ち止まっていても仕方ない。すでに彼女は渡り終えているのだ。女の子で、それも俺より年下であろう彼女がだ。ここでいつまでも怯んでいたら男が廃るというもの。

「……ふぅ」

大きな深呼吸をとる。足場になりそうな石を見繕い、それらをつたって飛び越えていく自分の姿を何度もシュミレーションする。

「…………よし」

　大丈夫。そう自分に言い聞かせながら、俺は意を決し地面を蹴った。

　そして最初の石へと着地。すかさず次の石へと、勢いがあるうちに再び地面を蹴る。素早く、それでいて慎重に。その繰り返しで一つ一つ順番に飛び移っていく。

　思っていたよりも、体は案外動いてくれるものだ。

気がつけば、俺は最後の石を蹴っていた。そうして地面へと着地。だがしかし——

「……あっ」

　さいごのさいごで足を滑らせ、体がのけ反ってしまう。視界がゆっくり上方へと移り変わり、まるでスローモーションのように時が遅く感じる。

　あ、これ、やばいやつだ。

　そう認識した途端、自分の意識が曖昧になっていく。まるで電源が落ちたかのように、頭の中が真っ白になり何も考えられなくなる。

これが死を悟る瞬間とでもいうのか。体が吸い込まれるように川へと倒れていく。

「……おっ！」

だが、すんでのところで腕を引っ張られ、何とか戻ってくる。そしてそのまま地面へと膝から崩れ落ちる。

これが九死に一生を得る、とでもいうのか。一瞬走馬灯が頭の中を過った気がする。

「大丈夫ですか？」

　俺の顔を覗き込む琴。その顔はひどく心配そうに歪んで…………いや、相変わらずクールな表情っぷり全開。さして変化はない。すこし泣きそうになってしまう。

「どうしました？　どこか怪我をしたんですか？」

「あ、いや大丈夫だ。ありがとう」

「いえ、無事で何よりです」

　まあ、心はすこし傷ついたが……。

　けど本当に感謝はしている。結構危ないところを助けてもらった。

これでまた一つ借りを作ってしまったという訳か。

「それじゃあ行きましょうか」

「ああ」

　ゆっくりと立ち上がり、ズボンに付着した土を掃う。

　次は一体何が起きるのやら。この森の危険性を今一度実感させられる。

　ここは男として自分よりも小さな女の子を護ってあげるべきなのだろうが、彼女の冷静さや先ほどの身のこなしを見るに、その心配は自分に向けた方が良さそうな気がする。

　——それにしても今の感覚、どこかで……。

　　　　　　　〇

　川を渡り終えたのはいいが、またしばたらく暗闇の道が続いた。

大きな道へと出る気配が一向に見えてこない。

「この先に本当に出口があるのか……？」

　ほぼ独り言のように呟いたその言葉に琴が答える。

「それは分かりません」

「分からないって……」

　まあ薄々そんな気はしていた。

　つまり、俺たちは今二人して迷子ってわけですか。…………結構ピンチだな、おい。

けれどそれは彼女のせいではなくこの森の異質さからきていることは重々承知している。

だがそうなると、なぜ案内を買って出たのか。認知していた物事が根本から覆されるとなると、自分の知識などもとより存在してないのと同じ。それは俺よりも彼女の方が理解していることだろう。だからこうなってしまうことも可能性の内に…………いや待てよ。こうなってしまう事こそ当たり前なんじゃないのか？　さっきから体験してきたように、この森で何も起こらないはずがない。それは彼女も口にしていたはずだ、「常識が通用しない」と。もしそうなら案内なんて最初から意味がないんじゃないか？

　自分の中でそう結論付けると、余計彼女が何をしたいのか分からなくなってくる。

　俺の手助けをしてくれているのは紛れもない事実だ。それも本心からというのがなんとなく伝わってくる。

　だからこそ今ここで確かめておいた方がいい気がする。

彼女が一体何をしようとしているのかを。

「……なあ」

「どうしましたか？」

歩きながら彼女が答える。視線は正面を向いたまま。

「案内してくれるって言ったよな？」

「はい、言いました」

「それって……どこにだ？」

「変なことを聞いてくるんですね。逆に聞きますけど、出口以外のどこがあるんですか？」

　妥当な回答。けれど……。

「その出口ってのは一体なんなんだ？　本当にたどり着けるものなのか？」

　ここにきて、もしかしたらという可能性が俺を錯乱状態に追い込む。

　ずっとこの森に囚われ続けてしまうのではないかという不安。

それが心を覆うようにまとわりついて離れない。

だがそんな俺とは裏腹に、彼女は顔色を一切変えず平然と言うのだった。

「それはあなた次第です」

「…………俺次第？」

　一体どういうことなのか。俺に出来る事など、彼女と比べたらたかが知れている。こんな場所で倒れていた理由も未だに分からないままなのだから。

　故にこうして得ているこの森の知識は、すべて分け与えられたものに過ぎない。

　だから俺が彼女以上に理解できることは何一つない。

　けれど、琴は言う。

「あなたが変わらなければここからは出られません。もしかすると間に合わなくなってしまう可能性だってあります。そうならないためにも私は手助けをしている。ただそれだけです」

間に合わなくなるって一体どういう意味だ？

　そう聞こうと思ったが、ふと彼女の足が止まった。

「……行き止まりですね」

　彼女の視線を追うようにして正面を向いてみると、そこには壁が立ちはだかっていた。

……いや、崖か？　どのくらい高いか見当もつかないが、断崖絶壁と形容するには十分な高さ。先ほどの川ならばまだしも、ここを越えるとなると不可能に近い。

ここまで来てなんだが、途中にあった分かれ道へと引き返し逆の道を進んだ方がいいだろう。

　そう思い俺は後ろを振り返る。

　だがそこはすでに——

「……マジか」

　俺たちが歩いてきた道ではなく、何かが続いていた。暗くて全貌はよく把握できないが、今見えている範疇で何かと断定づけるなら、それはおそらく吊り橋。歩いてきた道が一瞬にして変貌を遂げる。皮肉な話、超常現象に関して言うならばこの森は飽きなくて済みそうだ。

「…………」

　そして吊り橋のすぐ傍まで近寄り、安全性を確認してみようと足を置く。すると敷き詰められた木の板からギィっと今にも壊れ出しそうな不気味な音が響き、橋のロープを軽い力で引っ張ってみれば簡単に千切れそうなくらい劣化していた。

　その有りようが言うまでもなく危険な状態を表していて、もしもの可能性が頭を過る。普通なら絶対に渡りはしないだろうが、しかし進路を断たれた今、ここを渡る以外の選択肢は最初からないも同然だった。

「……渡るか」

「分かりました。じゃあ行きましょう」

　そう言ってと歩き始める琴。

その姿に俺は「お、おい」とすこし遅れて彼女を呼び止め、そして問いかける。

「あれはやらないのか？」

「あれ……ですか？」

「コイントスだよコイントス。さっきからずっとやってきただろ？」

「ああ、それのことですか」

　相も変わらず淡々とした物言い。数秒の沈黙が流れ、そして——

「最初から一つしか提示されていない選択肢で何を決めるんですか？」

「それは……」

　全くもってその通りな返答に言葉が詰まる。そうしてただ突っ立つ俺に琴は「でもどちらにしろ今回は大丈夫です」とそう口にした後、一言こう付け加えた。

「だっておそらく、ここが最後ですから」

「……最後って一体どういう——」

だがそう言い終わる前に彼女は吊り橋を渡り始める。「おい」と声を掛けるもその足は止まらないので、俺は仕方なくその後をついていく。一歩一歩進むたびに恐怖を掻き立てる音が足元から発する。……いや普通に怖い。こんなシチュエーション、アニメやドラマでしか観たことないぞ。

そんな弱音を心の内で零しながら、さらに歩く。

こんな物騒だというのにロープを頼ることができないのは少々心もとない。息を呑みながらちらりと下を覗き見る。一体どのくらい高いか見当もつかないが、目に見える範囲一体墨のような闇に侵されている。まるでまぶたの裏でも見ているような気分だ。

背筋にぞくりと冷たいものが走る。俺は落ちないようなるべく中央を歩くことにした。

「要さんはここから出たいと思っていますか？」

　数十メートルほど歩いた頃か、突拍子もなくそんなことを聞かれた。あまりに急な質問だったが、俺は「ああ」と素直に答える。というかそのつもりでここまで行動してきているんだ。ここから出たくないという考えは最初から持っていない。

どういう意図で今の質問をしてきたのかこちらとしては知る由もないが、今更そんなことを聞く必要性はないはずだ。

　と、続けざまにまた質問が飛んでくる。

「じゃあ要さんは、生きたいと思っていますか？」

「…………え」

　まるで、心を見透かされたような気分だった。

核心を突いてくるその発言に俺の足は自然と止まる。

一体どう答えるべきが正解なのかとしばらくの間口ごもってしまうが、その沈黙が逆に答えを表しているようなものだった。

「正直にお願いします」

そこで琴から念押しが入り、嘘を吐けない雰囲気に追い込まれる。

　だから俺は素直に答えてしまった。

「…………思ってない」

　そう自分の気持ちを吐露する。

　するとその瞬間、思い出したくもない記憶の一部が頭の中で渦を巻いた。それは学校での出来事。それも、生きることが嫌になるような、辛くなるようなそんな記憶ばかり。

　これまでも、そしてこれからも俺に一生憑きまとうであろう呪い。

　そんなものに、俺の心は支配されていた。

　それはまあ、世間によくある話。つまるところ、俺はいじめられていた。

　クラスメイトからのいじめで、暴力は振るわれなかったにしろ、いろんなことを強要させられ、皆の見せしめにされるかの如く酷い扱いを受けていた。一度、勇気を振り絞ってその事を先生に相談してみたこともあったが、「ただの思い過ごしだろ」とまったく取り合ってもらえず、状況は打開されることなく終わった。

　いじめは数か月も続き、いつしか学校を頻繁に休むようになり、そして、不登校となった今の俺が完成した。親からは色々と文句を言われたりもしたが、部屋に籠っていればあいつらに会うことも、いじめを受ける心配もない。自分の部屋こそが唯一安心できる安全地帯だった。

　けど、そんな場所さえも侵されてしまった。

部屋に籠っていると時々、自分を貶す声や笑う声がどこからともなく聞こえてきた。それは幻聴だと、こんな場所にあいつらが存在しているはずがないと十分理解していたが、毎日のように頭の中で反響するその声は俺の精神を徐々に蝕んでいった。

心が欠け、自分が自分でなくなる。それがどうしようもなく怖かった。

結局、学校にいても家にいても、安全な場所などどこにも存在しなかったのだ。

　…………じゃあなんで俺は今ここから出る事に必死になっているんだ？　家に帰ってもべつにいい事なんて一つもないのに。それならいっそここで死んでしまった方が——

　その瞬間、横から強い風が吹きつける。

バランスを崩し倒れそうになった俺はなんとかロープに掴ま——

「……あっ」

　しかしそれは握った瞬間にいとも容易く引き千切れ、そして俺は、吊り橋から放り出された。

　下は底の見えない真っ暗闇。生存確率なんてほぼゼロに等しいだろう。でもそこにあるのは恐怖ではなく、解放感。

……あぁ、やっと自由になれるのか。

そんな思いがふと頭に過った。

そして浮遊感を感じながら、俺は流れに身を任せ、目を閉じた。

「…………。…………。…………？」

　けど一向に俺の体は落ちていかない。

　なぜなのかと不思議に思いもしたが、それもそのはず。目を開け顔を上げてみれば、琴が俺の腕を掴んでいた。辛そうに顔を歪め、必死に踏ん張っている。

「お、おい！　危ないから早く離せ！」

　そう叫ぶも、琴は手を離さない。ましてや、落ちないよう自分の体を支えていたもう片方の手まで使って俺を助けてくる次第だ。これじゃ彼女まで……。

「おい！」

　すると掴んでいる手に力が入ったのが分かった。

「……絶対に離しません」

　苦しげに、それでいて力強い声が飛んでくる。

「もし今ここでこの手を離したら、あなたが死んでしまいます……」

「でもこのままじゃ琴までっ！」

「わたしなら……大丈夫です」

「大丈夫なもんか！　今にも落ちそうだろ、お前！」

　鳴りやまないギィという音と、崩れ落ちていく木くずが事態の深刻さを物語っている。

「もういい離せ！　本当に危険だ！」

　だがそれでも琴は離さない。

　なぜそこまでして俺を助けようとする。自分も犠牲になるかもしれないっていうのに、俺の為に命をかける必要なんてどこにもないだろう。……なんで。

　と、そんな俺の心を見透かしたように彼女は言う。

「まだあなたに、生きていてほしいから」

　……生きる。

　その言葉が酷く胸のドアを叩きつける。もう手放してしまいたいと思うほど望んでいないのに、ずかずかと土足で心の隙間を縫って入り込む。何の希望も、未来も見いだせないのに、どうしてここまで侵食してくるのだろう。

「わたしはあなたに生きていて欲しいんです」

「…………でもべつに生きていたっていい事なんて一つも——」

「あります」

　俺の言葉を遮り、琴はそう断言してきた。でも、

「ありますってお前……、知らないからそんなことが言えるんだよ。今まで俺がどんな苦労や苦痛を味わったか知らないくせに、平然と知った風に言うなよ……」

　言葉遣いがきつくなってしまう。自分でも最低だなとは思うけど、今の俺には優しい言葉を選んで言えるほどの余裕が、心の余裕がなかった。

　しかし彼女はまだ手を離さない。

「要さんの言う通り、わたしは要さんの味わってきた痛みを知りません」

「なら——」

「でも！」

そこで琴の口調が強くなる。

「それでもわたしはあなたに生きていてほしい！　……死ぬことが正しいなんて考え、あまりにも悲し過ぎます。もしかしたらこれからいろんな人との出逢いがあるかもしれないのに、自らそれを断とうとしないでください」

　苦しそうに訴える。必死な声で、顔で。

　その姿を見ているとどうしてか胸が痛くなる。彼女の影響でというのもあるが、元々心の奥底にあった小さな何かが今の言葉を受けて急に肥大化していく感じがした。何も見えないほど暗かった場所にいきなり明かりが差し込むような、そんな感覚。

　一体これはなんだろうかと自問自答してみるが、でもきっとそんなことをする必要性はなかったのだろう。だってそれは一瞬で俺の心を満たしたのだから。

「…………要さん」

　琴が俺の名前を呼ぶ。だけど彼女の手にこもる力はにじみ出す汗も相まってか結構弱まってきていた。おそらく残り時間はほとんどないだろう。

「さいごはあなたが決めてください。本当にこのまま何もせず落ちていくのか、それとも、この先嫌な事があったとしても必死になって生きていくのか。あなた自身が決めてください」

　俺が決める……。

　選択を委ねられる。

　もしここで助かったとしても、先に待っているのはあの忌々しい現実でしかない。向き合うこともできるか定かではない呪いじみたもの。そんなものが俺には付きまとっている。

それでも……

「俺は、生きた方がいいのか？」

　その問いに彼女は頷く。

「人生を諦めないでください」

　それは、俺がどこかで待ち望んでいた言葉なのかもしれない。脆くなった心をもう一度だけ修復してくれるような、そんな救いの言葉を、本当はずっと待っていたのかもしれない。

　自分に寄り添ってくれる人がいるというのが、こんなに嬉しいなんて思いもしなかった。

　頬を伝うこの感触がこんな状況で感じられることが、何よりも嬉しかった。

「…………琴」

「なんですか？」

　俺は目元を拭う。

「少しだけきついかも知れないが耐えてくれよ」

「……任せてください。体力には自信ありますから」

　その返事を聞き、俺は掴まれている手に力を籠め、反動で左手を上に向かって伸ばす。もしもの可能性なんて顧みず、ただ生きる為に動く。それが俺の決めた選択だった。

苦しそうなうめき声を何度も漏らす琴。計り知れない負担を掛けていることは重々承知しているが、もう少しだけ踏ん張ってくれと、残酷なことを切に願ってしまう。

「っ……あと少し……！」

　目いっぱい手を伸ばす。あと、ほんの数センチ。

　……届け！

手の先が橋に触れ、そして……

「よし！」

掴んだ。

　するとその瞬間、彼女に掛かる負担が減ったのか引き上げる力が強くなる。そんな力に引っ張られながら、俺自身もまた全力を振り絞り上へと体を這い上がらせる。

　木くずがぼろぼろと零れ落ちていくが、構うものかと体を動かし、そして——

「はぁ……はぁ……」

何とか窮地から脱することに成功した。

　仰向けになる。全身が濡れた綿みたいにぐっしりしていて重い。

　でも、顔の上にかざした右手をみて実感する。ああ、生きているんだな……と。

　ふと視線を横に向けてみるとそこには、腰が抜けたかのようにへたり込んで息を荒くしている琴の姿があった。俺よりもだいぶ疲弊している様子だが、彼女もちゃんと無事だ。それが何より嬉しく、また助けられたなと感謝の念が溢れ出す。

「……ありがとう」

　今はその言葉しか出てこなかった。それ以外に伝えることが出来なかった。

　けどなぜか彼女は首を横に振る。

「いえ、私は大したことなんてしていません。要さんの選択のサポートをした。私のしたことはたったそれだけで、今こうしてここにいることができるのは、要さんがそうしたい、生きたいと行動を起こしたからです」

「俺が行動を起こしたから……」

「はい。だからもう死のうなんて考えないでください。約束ですよ？」

　差し出される小指。それが何を意味するのかは考えるまでもない。

俺はその指を、自分の小指で握り返した。

「……ああ、約束する」

　彼女に助けられた命だ。もう無駄にしようなんて思わない。

嫌なことがあろうと、心が折れそうになろうと必死に生きていく。俺はそう決めたんだ。

するといつの間にか、橋の向こうには灯りが灯っていた。目も眩むような眩い灯り。けど不思議と、今までみたいな危険な雰囲気は感じない。

そこでふと一つの可能性が頭を過る。

「出口……なのか？」

　その方向を見つめ、俺はまだ軋む体を何とか立ち上がらせる。

　出口だよな……、いやそれ以外ありえない。ここから出られるんだ。そうだ、そうに決まっている！

「ここから出られるんだ、琴！」

現れた希望に興奮して声が大きくなる。

だが——

「…………？　どうしたんだ、なんで何も喋らないんだ？　出口かもしれないんだぞ？　ここから出られるかもなんだぞ？」

　そう問いかけるも、彼女はやはり無言のまま。

「あ、もしかしてさっきので怪我したのか⁉　それならそうと早く言ってくれればよかったのに……」

　俺は琴の近くへと腰を下ろし、彼女の体にどこか怪我がないか表面的に見る。衣服の上からだが、その限りではそういう傷跡はどこにも見当たらなく、「ふぅ」と安堵のため息が零れる。

「立てるか？　……いや、もしきつそうなら少し休んでからにした方がいいか」

「……いえ」

「あ、なんなら背中におぶってなんてどうだ？　って今の俺にそんな体力あるわけないか」

「……要さん」

「でもここまで来たんだ。何が何でも——」

「要さん！」

　彼女にはまるで似つかわしくない大きな声。その声が俺に口を紡がせた。

「私はここでお別れなんです。ここを渡った時から……いえ、出会った時からそう決まっていたんです。だから私はそっちの道に進むことはできません」

　彼女は淡々と言葉を並べる。

　けど俺には理解できない。……いや、きっと理解したくないんだ。

「なんでだよ、出口はもう目の前にあるんだぞ。あとすこし歩けばこんなうんざりする場所から出られるんだ。なのにどうして……」

　彼女は俺とは違う。それはどこかで認識していた。言ってしまえば違和感の塊。

　常に冷静で、何が起きたとしても動揺することなくそれらを受け入れていた。この森でそういうことが起きるとは解っていただろうが、それでもなおそこまで冷静にいられることはほぼ不可能に等しい。ましてやそれがこんな中学生くらいの少女ともなれば弱音の一つや二つ零してしまってもなんらおかしくはない。今しがたの出来事では多少なりとも平静さを欠いていたりもしたが、それを入れても彼女の言動は年相応のものではなかった。

　それが違和感の一つではあったが、けど一番はそこではない。

　節々で口にした、物事の本質を見通すかのような言葉の数々。その中でも極めて俺が驚愕したのは、自分の胸の内を覗かれたようなあの発言だった。

『生きたいと思っていますか？』

　普通、会ったばかりの人の秘密というか悩みを的確に触れてくることができるだろうか。

　そんな不可解な出来事もひっくるめたそのすべてが、彼女の神妙さを物語っていた。

　出会ってからまだ数時間。そんな些細な時間の中で、俺は琴のことをどれだけ知れただろうか。いいや、何も知れてない。何も知ろうとしてこなかった。自分に優しくしてくれた人に俺は歩み寄ろうとしなかった。

そんなことを今になって後悔し、俺は強く拳を握り締める。

　するとそこに暖かな感触が宿った。俺の拳が……彼女の両手に包まれていた。

「私はあなたの心の中に現れた幻に過ぎません」

「…………幻？」

　ふと聞き返す。

「はい、幻です。要さんを案内するために存在していた、空栗琴という幻。あなたがここから出られることを私は望んで、そして今それが叶おうとしている。こんなにうれしいことはありません」

「自分がここに囚われ続けても……か？」

「もともとここが私の居場所なので、離れることはできません。それに私がここに存在していないと、次この森にやって来てしまった人たちの手助けをすることができなくなります」

「この森にやって来てしまった人たち……」

　その発言からするに、俺よりも前にここにやって来た人が何人かいるということ。

　けどここには今、俺たち以外の人は誰もいない。もしかしたら本当はいるのかもしれないが、実際に会ってはいない。

「要さんは初めてでした。初めて、生きようと望んだ人。要さんのおかげで……こんな世界でも希望はまだ残っていると教えてもらうことができました」

　そして、琴は笑みを浮かべる。

「だから行ってください……お願いします」

　彼女の頬を一粒の涙がつたい、やがて零れ落ちる。

　……まったく、ズルいな。もしここで俺が嫌だと拒否すれば、それは裏切りになってしまうと彼女も絶対分かっているはずなのに……。

「……ああ、行くよ」

　だからそう言うしかない。俺が言える言葉なんて最初からそれしか残されていないようなものだった。

　握り込まれていた手を自ら解き、立ち上がる。そんな俺をただ優しい瞳で見つめる琴。

それが嫌なくらい胸に突き刺さるので、彼女に背を向け俺は足早に歩き始めた。

「……………………」

　けど歩いていく度に胸の痛みは増すばかり。選んだこの道は本当に正しいのだろうか。

　光が徐々に全身を包み込んでいく。それは体だけでなく、意識も一緒に。

　頭がぼんやりとしてだんだんと何も考えられなくなるが、不思議と恐怖はない。むしろ安心を覚えるくらいだ。そんな暖かな光の中を一歩一歩進んでいく。

　背後からふと、ありがとうと声が聞こえた気がした。

振り返る。だがそこはすでに光で溢れかえり、彼女の姿はまったく見えない。

　…………琴。

　心の中でそう呟いた。

　辺りがさらに輝きを増す。

それに伴って俺の意識はみるみる遠のき、やがて、零れ落ちていった。

　　　　　〇　　　△　　　□

　張り付いた瞼を重力に逆らうようにしてゆっくりと開く。

　視線の先には白い壁。それを病院の天井だと理解したのは、視線を横にずらし、そこに吊り下げられた点滴が見えたからだ。

　——俺は……。

さっきまで夢を見ていた気がする。だがそれが一体どんな夢だったのかは今となってはもう思い出す事さえ叶わない。何かとても大事なことだったような気もするが、まあそんなことは日常茶飯事と片付けてしまえばそれまでの話だった。

軋む体を起こし、頭を押さえる。なぜこんな場所にいるのだろうかと、俺はその原因となる記憶をたどる。

学校でのいじめに耐え切れなくなって、不登校になって、それでも消えないあいつらの影に苛まれて——

「…………ああそうか。死に損なったのか、俺」

——そうして自殺を図った。けど結果はこのざまで、失敗に終わってしまった。

　はあ、と深いため息が零れ、脱力しきった体を後ろに倒す。

「いたっ……！」

　体に鈍痛が走る。

　……皮肉なものだ。死にたかったのに死ねず、あの時の痛みのだけが今も物の見事に引き継がれ、自殺する前よりも更にマイナスな状況へと後退している。結局なんのために俺はあの痛みを味わったのか。……と言っても一瞬だったためそんな経験はまったくないが。

　考える事さえ嫌になった俺は、ふと横を向いた。

　病室に吹き込む風がカーテンを波のような動きではためかせている。

その隙間からは時折、俺を覗くように日光が差し込んできた。

　　　　　　　　　〇

　聞いた話によると、俺は助かる見込みがないと診断されたほど絶望的な状況だったらしい。

　救急搬送されすぐに緊急手術を受け、それ自体は成功に終わるも、中々目を覚ますことなく三日三晩ベッドで眠っていた。その間、三度も心臓が止まったと言う。体が衰弱し、まさに生死の境目を行ったり来たりと、そんな攻防戦を繰り返した。

けどそのすべてをなぜか奇跡的に、自力で回復した。その原因は未だに分かっていないが、これには医師や看護師も皆度肝を抜かれたと話している。

「なんでなんだろうな？」

　空に向かってそう問いかける。当然返事は返ってこない。

　あれから二週間。俺の体は順調に回復へと進み、こうして病院の中庭でリハビリが出来るまでに至っていた。

今はその休憩中。木の真下にあるベンチに腰を下ろし、木漏れ日を浴びながら至福の一時を満喫している。リハビリで疲労した体を癒すように自然を堪能していた。

「……それにしてもやっぱり不思議だな、止まった心臓が自力で回復するなんて」

それも三度も。これじゃまるで、俺が本当は生きたいと願っているみたいだ。

…………いや正直に言うと、全くもってその通りだった。あんなに死ぬことに執着していたのに、なぜか今はその感情がめっきりと消え去っている。これまで死に傾いていた感情すべてが、まるでシーソーの如く生へと傾いていた。

　けどそれがなにをきっかけとしてなのかはやはり分からない。でもただ一つ言えるのは、そう思い始めるようになったのはあの日、俺が長い眠りから目覚めた時ぐらいからということ。

「一体どういうことなんだ？」

……今の件と言い、回復した心臓と言い、曖昧な何かが思考の中で錯綜する。

俺はなけなしの知恵で頭を働かせるが、けれども何も思い浮かばない。

「……分からないことはいくら考えても分かるはずないか」

だから俺は潔く諦めることに決め、残りの時間を休息に充てることにした。

頬を撫でる風が気持ち良すぎてついうたた寝をしてしまいそうになる。

と、そんな穏やかな風の音に交じってどこからか異質な音、そう、金属音のような音が聞こえてきた。

　一体どこからだろうか。気が付くと俺は、音が聞こえた方へと自然に足を動かしていた。

　緑の木々に挟まれた遊歩道を道なりに進み、手すりを頼りに緩やかな勾配を上る。

　すると少ししたところで視界が開け、見晴らしのいい高台へとたどり着いた。

「…………綺麗だな」

　そんな言葉が口から零れ出た。

　街の景色が隅から隅まで一望できる、その眺めはまさに絶景。

　外にはリハビリの為に数回足を運んだことがあるが、こんな眺めのいい場所があるなんて今まで知らなかった。いわゆる秘密のスポットというやつだろうか。まあ俺だけが知らない可能性もあるが。

　と、そんなスポットにはどうやら先客がいたようで、俺と同じく病院服を着ている。

俺の足音に気づいたのかこちらに振り向いてきて、そして視線が合う。

　少女だった。おそらく、俺より二つか三つ年下の。

その顔はどことなく見覚えがあるような気がしたが、一体どこで見たのかいまいち思い出せない。

とりあえず定番の挨拶を口にしてみる。

「……えっと、こんにちは」

「こ、こんにちは」

　たじろぎながらも少女は挨拶を返してくれる。

　そして数秒と経たずして気まずい雰囲気となった。これがコミュニケーション能力、略してコミュ力に欠ける者の末路か、と自分の能力値の低さを改めて実感させられる。これ以上ここにいたら、この空気に押しつぶされ俺が圧死してしまう。

ここは後からやって来た俺が身を引くのが道理というものだろう。

そうして足早に立ち去ろうと体を反転したその時、それは俺の目に映った。

「君が手に持っているのって……」

「…………？　こ、これですか？」

　そう言って彼女はそれ——コインを手のひらに乗せ俺に見せてくる。

一方は花が描かれ、もう一方は鳥が描かれている銅色のコイン。あまりそういう分野には詳しくないが、おそらく市販のものとは違うのだろうとなんとなく確信が湧いた。

そして既視感がまた俺を襲う。

「それって、どこで手に入れたんだ？」

「い、いえ……このコインは手に入れたんじゃなく、もともと昔から家にあったもので、私のご先祖様のものです」

「ご先祖様の……」

　なるほど、骨董品という訳か。それなりに由緒がありそうだ。

　……ってなんで俺はそんなことを聞いてるんだ、迷惑だろうが。

　自分で自分にツッコミを入れ、今度こそ立ち去ろうと彼女に背を向ける。

「……あ、あの」

　だがしかし、今度は逆に彼女の方から声を掛けられた。

後ろを振り返り「なんだ……？」と俺は少女に尋ねる。

　すると、一つの提案が飛んできた。

「折角なので、コイントスで勝負していきませんか？」

「………………勝負？」

　すこし遅れて俺はそう聞き返す。

　意外だ。見た目ならともかく、口調や立ち振る舞いに反して勝負事が好きだとは……。

「あの、どうでしょうか……？」

「ああ、いいぞ」

だがなぜか俺は無性にやる気が起きていた。どこから湧いて出たのかは知らないが、これは不思議とやっておきたい気分だ。

「それで、何を決めるんだ？」

「え、えっと……それはまだ何も決めてません。け、けどこういうのはどうでしょうか！　コイントスで負けた人は勝った相手の言うことを一つだけ聞く！」

ハイリスクハイリターン。一瞬にして危険な勝負へと変貌を遂げてしまった。

俺は息を吐き、そしてなだめるように彼女を手で制す。

「ちょっと待て、本当にそれでいいのか？　君は今危ない発言をしていると自覚した方が——」

「——スリルとリスクがないと勝負は楽しめませんから」

「………………」

……この少女、危ない子だ。

「それで表と裏、どちらを選択しますか？」

「…………。裏だ」

「じゃあ私は表ですね」

　そうして淡々とコインの裏表が決まる。

　こんなやり取りをいつか、どこかでしたような気がする。ただの幻覚かもしれない。俺の思い過ごしかも知れない。けど、もしそういう出来事が過去に本当にあったのだとしたら……。

妄想が膨らんでしまう。僅かに輝きを増した日差しが、いつの間にか俺を蝕んでいたらしい。

そうだ。こういう時こそ冷静に、だ。周りの自然を全身で感じながら、大きな深呼吸をとる。

すこしぼんやりとしていた意識が完全に復活し、頭の中が活性化していく。

　すでに少女は準備オーケーといった様子。どうやら待たせてしまった。

俺は自分の準備が整ったことを知らせるため首を縦に振って頷くと、少女もまたそれに続き頷いた。

「じゃあ行きますよ。……せーの！」

　その合図とともに彼女の指から勢いよくコインが弾かれる。

　響きの良い音色を奏でながら上へ上へと上昇するその様は、弾き出した少女の姿とも合わせ鮮やかで美しい一枚絵となり、まるでいつかどこかで見た誰かの姿を彷彿とさせた。